様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 １０ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３７００

研究課題名（和文）献血者の贈与と共同性の論理に関する福祉社会学的実証研究

研究課題名（英文）Giving and Solidarity in Blood Donation: An Experimental Study in Welfare Sociology

研究代表者
吉武　由彩（Yoshitake, Yui）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授

研究者番号：７０７５８２７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：献血における血液の贈与について実証研究を通して分析した結果、家族や友人に輸血を受けて助けられた人がいる場合や、家族や友人に献血者やボランティア活動経験者、医療関係者などがいる場合に、献血をしやすいことがわかった。さらに、互酬性という観点から分析を行った結果、事故や怪我という認識のずれが献血という贈与を支えていることが示された。加えて、献血では献血者と受け手との相互作用はないものの、受け手に代わって、中間組織のスタッフとの相互作用が献血という贈与を支えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年日本では献血者数が大きく減少し、将来的には必要な量の血液が集まらないことも危惧されている。しかしながら、血液をめぐる社会学的研究は少なく、数少ない研究も肝炎やHIVの蔓延を背景に血液の安全性に着目してきた。本研究において献血者の動機や規定要因の分析を行い、その実態を明らかにしたことは、今後の献血者の増大に向けて重要であると考えられる。加えて、学術的な観点からは、本研究において献血を事例としながら、匿名他者への贈与や連帯形成の要件を提示したことに意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Through empirical research analyzing blood donation, it was found that people are more likely to donate blood when they have a family member or friend who has been helped by a blood transfusion, or when they have a family member or friend who is a blood donor, has volunteered, or is a medical professional. Furthermore, analysis from the perspective of reciprocity showed that there was a misconception that blood was used to treat accidents and injuries. In addition, while there is no interaction between the blood donor and the recipient in blood donation, there is interaction between the blood donor and the staff of the blood donation center. Communication by the blood donation center staff encouraged blood donations.

研究分野：福祉社会学

キーワード：献血　贈与　匿名　ボランティア　福祉

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

血液をめぐる社会学的研究は多くはなく、数少ない研究も肝炎や HIV の蔓延といった血液の安全性をめぐる問題を背景として主に展開されてきた。他方で、近年日本では献血者数が大きく減少している。献血とは、自発的な無償の血液の提供を指すが、献血者数は最も多かった 1980 年代には年間 800 万人以上だったが、現在では約 500 万人に減少している。このままでは将来的に必要な量の血液が集まらない可能性があり、献血者数減少の問題は喫緊の課題である。そのため、献血をめぐっては、安全性の観点だけでなく、「なぜ人は自発的に無償で血液を提供するのか」といった、献血行為の成立要件に関する福祉社会学的研究が必要になる。しかし、このような観点からの研究は非常に限られており、献血の動機や規定要因をめぐっては、十分に明らかにされていない。

本研究では、献血の実証研究を進めたが、その際、海外の先行研究における知見を参考にしている。海外の献血研究を整理すると、R. Titmuss『贈与関係論』（1970 年）が古典的研究として重要な位置を占めており、そこでは献血における「贈与」や「互酬性」に着目される。Titmuss は、献血の促進には互酬性の意識が重要と述べるが、彼は献血研究の刊行の 3 年後に他界するため、この点についてはアイデアにとどまり、十分な調査データが提示されることはなかった。そこで、本研究では、献血の実証研究にあたり、Titmuss を参考に「贈与」や「互酬性」についても着目しつつ分析を行った。

２．研究の目的

近年献血者数が減少する中、世界的にも研究が少ない献血を取り上げ、「なぜ人は自発的に無償で血液を提供するのか」を明らかにすることが本研究の目的である。具体的には、第 1 に、インタビュー調査や質問紙調査などの実証研究を通して、献血者における贈与と共同性の論理について明らかにすることを目的とする。この際、贈与や互酬性という観点からも分析を行う。第 2 に、献血における贈与について包括的に把握することを目指す。その際、献血の動機だけでなく、規定要因の分析についても実施する。第 3 に、献血の実証研究を通した匿名他者との連帯形成のための要件の提示を行う。

３．研究の方法

本研究では、第 1 に、日本および海外の献血関連の文献収集・整理、日本の血液事業に関する情報収集・整理を行った。これらの作業では、文献調査を行ったほか、日本赤十字社の献血部門のスタッフへの聞き取り調査を行った。第 2 に、既存の統計データの収集、既存の調査の再分析、新規の質問紙調査の分析から、献血の規定要因の分析を行った。既存の調査の再分析については、2012 年に実施した「縁と助け合いに関する調査」のデータを主に使用した。本調査は九州在住の 25～55 歳の 6,000 人を対象に実施されたものである。新規の質問紙調査としては、日本全国の 16～69 歳の 1,000 名を対象としたインターネット調査「ボランタリー行為と献血に関する調査」を行った。主な独立変数は、性別、年齢、学歴、年収、職業、婚姻状況、近隣関係、友人関係などである。第 3 に、献血者や日本赤十字社の献血部門のスタッフへの聞き取り調査をもとに、献血者の贈与と共同性の論理の検討を行った。献血者へのインタビュー調査については、とりわけ献血回数が多い人々（10 代や 20 代では献血回数 30 回以上、30 代以上では献血回数 50 回以上）を対象とした。日本の血液事業では、くり返し献血をする「複数回献血者」と呼ばれる人々を増やすことが重点目標とされている。そこで、本研究でも、くり返し献血をする人々に焦点を当てた。主な分析視角は贈与や互酬性である。

４．研究成果

（1）献血者における贈与と共同性の論理

献血回数が多い人々（10 代や 20 代では献血回数 30 回以上、30 代以上では献血回数 50 回以上）を対象としたインタビュー調査の結果、献血動機のひとつとして、家族や友人が過去に輸血を受けたということが語られた。そうした人々が、献血を「恩返し」「お返し」として互酬的な観点から捉えていた。

他方で、家族や友人が過去に輸血を受けて助けられたという経験がなくとも、献血をくり返す人々がいる。それらの人々へのインタビュー調査をした結果、家族や友人に献血者がいる場合、ボランティア活動経験者がいる場合に、献血をしやすいことが示された。さらに、献血された血液は医療現場で使用されるため、家族や友人に医療関係者がいる場合にも、献血をしやすいことがわかった。

ほかにも、特段大きなきっかけ等はなく、初回献血時には「なんとなく」「興味本位」で献血を始める「消極的献血層（受動的献血層）」がいることがわかった。くり返し献血をする人々であっても、必ずしも最初から献血への強い気持ちを持っていたわけではなく、最初から高頻度で献血をしていたわけではない。20 代や 30 代頃は仕事や家庭で忙しく献血を中断し、40 代になってから献血を再開していく人々もいた。ただし、くり返し献血をする人々は、そのほとんどが 10

代または 20 代前半のうちに初回献血を経験していたことから、若年層のうちに一度献血を経験しておくことも重要だと言える。

先行研究の整理から着想を得て、「互酬性」の観点からも分析を行った。互酬性というと広い意味で捉えることもできるが、今回は、将来自分や家族が輸血を受けるかもしれないと献血者が考える場合を「互酬性の予期」と捉え、これに着目した。献血者がどのように互酬性を予期しているのか、その中身を分析した。その結果、献血された血液が医療現場で使用される時、実際には事故や怪我の場合に使われることはあまりないものの、対象者からは、自分や家族が事故や怪我の場合に輸血を受けるということが頻繁に聞かれた。つまり、事故や怪我という認識のずれによって、互酬性の予期が支えられていることが示された。

さらに、献血について「生きづらさ」という観点からも分析を行った。献血者が教育や職業達成をめぐる生きづらさ、家族や友人、近隣関係などの関係性をめぐる生きづらさなどを抱え、それを献血を通して弱めていることがわかった。献血に行くことで、必要とされている、役立っているという実感を得て、生きづらさを弱めていた。

（2）献血の規定要因

献血者とは誰なのか、過去 1 年間の献血有無を従属変数に量的分析を行った。単純集計の結果、過去 1 年間に献血をしたことがある人々は回答者のうち 13.0%であった。クロス集計の結果、男性、40 代、高収入、高学歴、経営者・役員・正社員の場合に献血をしやすいことがわかった。婚姻状況や友人数などについては、有意差はみられなかった。

さらに、献血者の中でも、献血回数が多い人々とはどのような人々なのか分析を行った。累積献血回数を従属変数に量的分析を行った。単純集計の結果、献血者のうち累積献血回数は、1〜2 回 30.5%、3〜10 回 42.7%、11〜30 回 14.6%、31 回以上 12.2%であった。クロス集計の結果、男性、高収入、高学歴、経営者・役員・正社員の場合に、献血回数が多くなりやすいことがわかった。加えて、過去 1 年間の献血有無を従属変数とした場合は有意差がみられなかったが、今回は、婚姻状況や友人数などについても有意差がみられた。既婚、友人数が 11 人以上あるいはいない場合に献血回数が多くなりやすいことがわかった。

（3）匿名他者との連帯形成のための要件

本研究では、献血を事例として取り上げて実証研究を行ってきたが、抽象度をあげて、献血という匿名他者への贈与がいかにしてなされるのかについても検討した。匿名他者との連帯形成の要件として浮かび上がったのは、以下の点である。

第 1 に、贈与の受け手が身近にいることが、匿名他者への贈与を支えていた。匿名他者への想像力は、受け手が身近にいる場合に働きやすいことがわかった。同質性に基づく連帯に支えられていることが、献血の事例においても確認できた。

第 2 に、家族や友人などに献血者やボランティア活動経験者がいて、それらの人々との日々の相互作用の中で匿名他者への贈与の重要性を学んでいた。匿名他者への贈与であっても、それを支えているのは、周囲の人々との相互作用であり、学びであった。

第 3 に、互酬性という観点から分析した結果、事故や怪我という認識のずれが想像力を支えていた。正しい知識だけが匿名他者への贈与を支えているのではなく、時に認識のずれがむしろ贈与を支えている場合がみられた。

第 4 に、生きづらさを抱えた人々が匿名他者への贈与を支えていた。献血を通して必要とされていると感じて、生きづらさを弱めていた。この時、献血者と受け手の間には直接の接点はないものの、献血者は献血ルームのスタッフとの交流を持つ。つまり、受け手との相互作用に代わって、中間組織のスタッフとの相互作用が、匿名他者への贈与を支えていた。

最後に本研究の意義と今後の課題について確認する。本研究の意義は、献血者数減少を背景に、先行研究が少ない献血について実証研究を行ったことである。他方で、本研究の課題は、匿名他者への贈与と考えた際、献血のほかにも骨髄提供、臓器提供、寄付・募金などさまざまなものがあるものの、ほかの行為については分析できていないことである。献血だけでなく、骨髄提供や寄付・募金などについても、社会学における先行研究は多いとは言えず、先行研究の収集による比較分析を試みたものの、十分に行うことができなかった。そのため、今回提示した匿名他者との連帯形成のための要件とは、献血のみに当てはまるものかもしれない。匿名他者への贈与や連帯について研究を進めるうえでは、献血だけでなく、今後は骨髄提供などのほかの行為についても実証研究を進めていく必要がある。それによって匿名他者への贈与について引き続き考えていくことが必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 吉武由彩	４．巻 71(3)
２．論文標題 献血を重ねることと互酬性の予期――聞き取り調査の結果から見る献血行為の一断面	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会学評論	６．最初と最後の頁 429-446
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4057/jsr.71.429	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉武 由彩	４．巻 17
２．論文標題 なぜ献血を重ねるのか――受血者不在の場合の献血動機と消極的献血層の動機変化	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福祉社会学研究	６．最初と最後の頁 159-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11466/jws.17.0_159	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 吉武由彩
２．発表標題 ボランタリー行為と生活構造分析
３．学会等名 日本社会分析学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

１．著者名 吉武由彩	４．発行年 2023年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 288
３．書名 匿名他者への贈与と想像力の社会学――献血をボランタリー行為として読み解く	

1．著者名 室井研二，益田仁，山下亜紀子，桑畑洋一郎，浅利宙，吉武理大，作田誠一郎，金本佑太，吉武由彩，松本貴文，高嵜浩平，東良太，杜安然，吉田全宏	4．発行年 2022年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 298
3．書名 社会の変容と暮らしの再生　シリーズ生活構造の社会学2	

1．著者名 三隅一人、高野和良、吉武由彩、益田仁、松本貴文、山下亜紀子、藤田智子、井上智史、孔英珠、里村和歌子、大畠啓、森康司、松岡智文、桑畑洋一郎、福井令恵、挽地康彦	4．発行年 2020年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 288
3．書名 ジレンマの社会学	

1．著者名 吉武由彩，福本純子，浅利宙，黒川すみれ，松本貴文，市原由美子，吉武理大，三代陽介，井上智史，桑畑洋一郎	4．発行年 2023年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 232
3．書名 入門・福祉社会学 ： 現代的課題との関わりで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関